

日本語学習者による複合動詞「～こむ」の習得

松田文子*

キーワード: 「～こむ」の意味タイプ, 語彙の意味習得, 過剰般化, コア図式

要旨

本稿は、「～こむ」を後要素とする複合動詞を取り上げ、日本語の超上級者を対象にその習得状況をみたものである。「～こむ」の用法は大きく分けて、①「～の中に入る」という意味で理解されるタイプ(例: プールに飛びこむ)、②「～の中にしっかり/奥深く～する」という意味で理解されるタイプ(例: 庭に埋めこむ)、③「V1があらわす状態へ変化し、その状態に固着する」という意味で理解されるタイプ(例: 黙りこむ)、④「反復行為により生じる状態(多くは満足できる状態)への変化」という意味で理解されるタイプ(例: 十分に走りこむ)の4タイプがある。そしてこれらの意味タイプは、前項動詞と後項動詞「～こむ」の結合のあり方によって生じるものである。

本調査では習得状況を探る方法として、「～こむ」を後要素とする複合動詞54語を提示しそれらを用いて短文を作るように求めたが、産出された誤用の多くは「～こむ」が単純動詞に強意を添えるという用法(例: 庭にカプセルを埋める≡庭にカプセルを埋めこむ≡上記の意味タイプ②)の類推から、 $\langle N+V1 \div N+\{V1+こむ\} \rangle$ といった方略を作り上げ、その方略を過剰に適用していると推測されるものであった。以上から、調査対象者たちは「～こむ」には多様な意味があることは知っていても、それらの意味をどの結合の「V1+こむ」(V1は前項動詞)と結びつけてよいか分からないということが明らかになった。

この結果は、「～こむ」の多様な意味を自力で学ぶことには限界があり、何らかの支援が必要であることを示唆するものであると考えられる。

1. はじめに

1-1. 問題の所在と研究の意義

日本語学習者にとって、複合動詞の意味を正しく把握することは容易でないことが指摘されている。例えば、森田(1979:79)は「学習者が日本語を学ぶ場合、教科書によって与えられる動詞のほとんどは単純動詞である。学習者は個々の単純動詞の意味・用法には習熟するが、それら

* MATSUDA Fumiko: お茶の水女子大学大学院博士後期課程。

の動詞を組み合わせた複合動詞については、学習の機会があまりない。したがって、複合動詞に関する知識が不十分なまま上級段階にすすんでしまい、夥しい複合動詞の波にぶつかって困惑することになる。即ち、個々の単純動詞が既習語であっても、それらが合成する意味が理解できるとは限らない。」と述べ、複合動詞の習得の難しさを指摘している。

森田の指摘するように、複合動詞の体系的な学習の機会を持たない学習者は、個々の複合動詞に出会う度に人に聞いたり辞書を引いたりして一つずつ意味を理解することになるが、複合動詞のすべてが辞書に収録されているわけではない(石井 1988)¹。また複合動詞は日本語を豊かにするものではあるけれども使わなくても意味は通じることが多いため、学習者は使用を回避 (avoidance) してしまう傾向が強く、習得は進みにくい。しかし、回避することで「表現が単調で幼い」(姫野 1997: 232)と受け取られることもある。

以上の状況を考えると、日本語教育において複合動詞をいかに教材に盛り込んでいくべきか、またどのように指導していくべきかが課題となるが、そのためには学習者はどのように当該項目の意味を理解しているか、どのような点が習得困難だと感じているか、といった基礎的研究が必要となる。しかしながら、管見の限りではこれらの点についての複合動詞研究は殆どない。

本稿は、複合動詞指導を目指す第一歩として複合動詞後項「～こむ」を取り上げ、学習者の「～こむ」の習得状況はどのようなものか、また習得困難点は何かについて明らかにしようとするものである。「～こむ」を取り上げる理由は、「～こむ」は多くの前項動詞と結合し²、「～こむ」の意味は前接する前項動詞によって多様に異なるため、その意味習得はとりわけ困難であることが予想されるからである(以下、前項動詞を V1、後項動詞を V2 と記述する)。

1-2. 「～こむ」の用法

ここで「～こむ」の用法についてみておきたい。松田 (2001) は、「V1 + こむ」の結合タイプによる「～こむ」の用法を 2 類 4 種に大別している(表 1)。

表 1 「～こむ」の意味分類

二格(～の中に)を伴う「～こむ」		二格を伴わない「～こむ」	
A タイプ	B タイプ	C タイプ	D タイプ
V1 は「内部移動」を含意しない	V1 自体が「内部移動」を含意する	V1 が示す状態への変化とその状態への固着	V1 の(反復)行為により生じる状態変化
例) 飛びこむ, 呼びこむ	例) 植えこむ, 埋めこむ	例) 冷えこむ, 眠りこむ	例) 十分に走りこむ

¹ 『複合動詞資料集』(1987 国立国語研究所)によると、辞書に載らない複合動詞の数は 62.8% を占めている。

² 国立国語研究所 (1987) の調査では、「～こむ」と結合する前項動詞の数は 231 語であり、「語彙的複合動詞」の中では第 1 位である。

表1にみるように、「～こむ」の用法は移動先を示す「二格を伴う用法」と「二格を伴わない用法」に大別される。さらに「二格を伴う用法」は、「～こむ」を付加することによって新たに「内部への移動」の意味が生じる結合タイプと既に「内部への移動」を含意するV1に「～こむ」がついた結合タイプに分けられる。例えば、「人を呼ぶ」における「呼ぶ」には「～の中に～を入れる」という意味は含意されないが、「人を呼びこむ」になると「～の中に」という意味が生じる。このような結合タイプがAタイプである。一方、「花を植える」における「植える」は既に「～の中に～を入れる」という意味を含意しており、「花を植えこむ」は「内部への移動」の意味を持つV1に「～こむ」が付加されている。この場合、「～こむ」は「しっかり、奥深く」といった「あるものの内部への固着」の意味をあらわしている。このような結合タイプがBタイプである。

また「二格を伴わない用法」も二つのタイプに分けられる。一つは、V1が示す、非意志的な状態への変化とその状態への固着をあらわすタイプであり、今一つは、人の意志的な行為(多くの場合反復行為)により生じる「満足できる状態」への変化をあらわすタイプである。例えば、「眠る」は眠っていない状態から眠っている状態への変化をあらわすが、「～こむ」をつけることによって「眠っている状態」に「しっかり、すっきり」固着しているという意味が付加される。このようなタイプがCタイプである。他方、「彼は走る」における「走る」自体は状態変化をあらわす語ではないが、「彼は走りこむ」になると、繰り返し走った結果、マラソン大会などの出場に向けて満足できる状態に到達するという意味が付加される。このようなタイプがDタイプである。

以上を踏まえると、一口に「V1+こむ」の意味といっても、その意味の習得困難点は「V1+こむ」の結合タイプによって異なる可能性がある。そこで本稿では、具体的な研究課題として次の3点を設定した。

- (1) 表1の4種の「V1+こむ」の意味の習得状況はどのようなものか。
- (2) 学習者は実際の使用に当たって、どのような過剰般化(overextension)³を犯すか。
- (3) 4種の結合タイプにおける習得困難点は何か。

2. 調査の概要

2-1. 調査の対象者

- (1) 日本語学習者(以下、学習者)である超上級者10名(韓国5, 中国5)。全員都内の大学・

3 Selinker (1972) のいう過剰般化(overgeneralization) の概念は、一般的には、目標言語における文法規則の過剰適用に使われる用語である。一方、Clark (1973) は意味領域を越えてある語を過剰に適用する意味の過剰般化を“overextension”という用語で説明している。本稿では、後者の意味で過剰般化という用語を用いることにする。

大学院に所属している。

- (2) 日本語母語話者(以下、母語話者) 3名(50代の男性1, 50代の女性2)。

2-2. 調査方法

調査方法としては、次の2段階の手続きをとった。

(1) 学習者を対象とした調査方法

学習者を対象とした調査は、質問紙による方法をとった。質問紙に「V1+こむ」の複合動詞54語(資料1)を提示し、それぞれの複合動詞を使って短文を作るよう求めた。また当該語の既知・未知度について、「既知」の場合「①自分でもよく使う」「②自分では使わない」、「未知」の場合「③意味の類推ができる」「④意味の類推は難しい」の計4段階で自己申告してもらった。教示文は「次の複合動詞を使った例文を『～こむ』のニュアンスが分かるようにできるだけ詳しく書いて下さい。文の数はいくつでもいいです。またそれぞれの複合動詞について「知っている語」か「知らない語」かについても、①②③④の中から選んで○をしてください。」というものであった。

(2) 母語話者による判定

次に、学習者が産出した文すべてについてその文が受容できるか否かを「1~4」の4段階で、母語話者3名に判定してもらった。また「3」「4」と判定した場合は、その理由についてもコメントしてもらった。教示文は「『V1+こむ』に着目して、これらの文が受容できるか否かを「1(受容する)—2—3—4(受容しない)」の4段階で記してください。また「3」「4」と判定した場合は、どこに違和感があるかについてコメントしてください。できれば、どう修正するかについても記述してください。」というものであった。

3. 調査結果

3-1. 研究課題(1)——「V1+こむ」の意味の習得状況はどのようなものか

学習者を対象とした調査から「V1+こむ」を用いた文は589文産出されたが、その中、既知・未知度④「未知語であり意味の類推は難しい」と申告して産出された文は、無理やり産出した文であると判断されるため考察の対象から外し、本稿では既知・未知度が①②③の490文のみを考察の対象とした。

次に、母語話者3名に490文を上記の判定基準によって判定してもらい、各産出文に対して1人でも「3」または「4」と判定した文はすべて「受容度の低い文」(以下、低受容度文と記す)とした。その結果、490文のうち、低受容度文であると判定されたのは215文であった。「～こむ」の結合タイプごとの判定結果は表2の通りである。

表 2 結合タイプ別高受容度文 / 低受容度文

結合タイプ	高受容度文 (括弧内は文数)	低受容度文 (括弧内は文数)	計	備考 (提示語数)
A	42.3% (96)	57.7% (131)	227 文	24 語
B	62.1% (95)	37.9% (58)	153 文	17 語
C	79.5% (66)	20.5% (17)	83 文	9 語
D	66.7% (18)	33.3% (9)	27 文	4 語
計	56.1% (275)	43.9% (215)	490 文	54 語

表 2 に示したように、全体では、産出文の約 43.9% が低受容度文と判定された。また未知度 ④ と申告された数は 110 (語×人数) であり、全体の 20.4% を占めた(資料 2, 3, 4, 5)。このことから、超上級になっても複合動詞「V1+こむ」の理解度は全体に低いことが裏付けられた。

用法別にみると、「～こむ」の用法の中で最も習得し易いと思われる A タイプの低受容度率が、予想に反して 57.7% と最も高く、B タイプに比べると約 20% も高くなっている。C タイプの低受容度率は 20.5% であり、全体の中でも最も低い数字を示している。また D タイプは既知・未知度が ④ であると申告された項目が多く、産出文自体が 27 文と少ないにも関わらず、低受容度率は 33.3% であった。

3-2. 研究課題 (2)——学習者は実際の使用に当たって、どのような過剰般化を犯すか

前節で「V1+こむ」の理解度は全体的に低く、とりわけ A タイプの受容度率が低いという結果をみたが、では「V1+こむ」の使用において学習者はどのような過剰般化を犯すのだろうか。本節では、母語話者が低受容度文と判定した際に付したコメント(判定理由)を分析するという方法で、学習者の過剰般化の種類を明らかにする。以下では便宜上、「二格を伴う用法」(A タイプ、B タイプ)と「二格を伴わない用法」(C タイプ、D タイプ)に分けて考察する。

(1) 二格を伴う「～こむ」の用法 (A タイプ、B タイプ)

3名の母語話者が(学習者の産出した文を)低受容度と判定する際に付したコメントを通覧してみると、A タイプ、B タイプの産出文に対して「低受容文と判定した理由」は、以下の 4 類 8 種(理由 i~viii)にまとめられた。前項動詞 (V1) が適切なものを I 型、適切でないものを II 型とすると、それぞれに後項動詞 (V2) が適切なものと適切でないものがあり、それらの組み合わせは 4 タイプになる。これらに沿って、コメントの内容を分析したのが表 3 である。

尚、理由 ii と理由 vi の違いは、理由 ii の場合、単純動詞(「投げないで」)に変えることも別の後項動詞(「投げ捨てないで」)に変えることもできるが、後者は単純動詞(「*取って」)に変えることはできない。

以上、母語話者が低受容度文と判定した理由を 4 類 8 種に分類したが、言い換えれば、これら

表3 低受容度文と判定した理由 (A タイプ, B タイプ)

	V1	V2	低受容度文と判定した理由
I 型	○	○	理由 i) 移動先が分からない。推測できない。 例 1: 懐かしい歌が FM から流れこんできた。 (→「部屋の中に」を付加する)
		×	理由 ii) 「内部への移動」という意味のない文脈で「～こむ」をつけている。 例 2: (通行人)二階からそんなものを投げこまないでください。危ないじゃないですか。 (→投げないで, または投げ捨てないで)
			理由 iii) 内部に入ったものが「そこに留まらない」文脈で「～こむ」をつけている。 例 3: 紙以外のものをトイレに流しこまないでください。 (→流さないで)
			理由 iv) 「動作・行為そのもの」に関心がある文脈で, つまり「しっかり, 奥深く」などの強調ニュアンスのない文脈で「～こむ」をつけている。 例 4: カッコの中に適当な言葉を埋めこんでください。 (→埋めて)
			理由 v) その行為の目的を明示せずに「～こむ」をつけている。 例 5-1: 今夜は友達のアパートに泊まりこみます。 (→泊まります) 例 5-2: どこの家だって 10 年も住みこんだら, ものは山ほど増える。 (→住んだら)
			理由 vi) 他の後項動詞 (V2) と混同している。 例 6: ベンチャー企業の仕事に取りこんで, もう 5 年。そろそろ成果の出る頃だ。 (→取り組んで)
II 型	×	○	理由 vii) 他の前項動詞 (V1) と混同している。 例 7: 犬を犬小屋に駆けこみます。 (→追いこみます)
		×	理由 viii) 全く別の語と混同している。 例 8: 友達と一緒に行こうと呼びこまれた。 (→誘われた)

注: ○ = 適切使用, × = 不適切使用をあらわす。(→) は修正案。

は学習者が「V1 + こむ」の使用に関して犯す過剰般化(エラー)のタイプであると考えられる。

(2) 「二格を伴わない用法」(C タイプ, D タイプ)

C タイプ, D タイプについては, 判定者も低受容度文とした理由を明確に説明することはできなかった。そのため C, D タイプについては, 先行研究を参考に過剰般化のタイプの分類を試みた。

先に述べたように, C タイプの「～こむ」は, V1 の示す, 非意志的な状態への変化とその状態への固着をあらわす用法である。C タイプには, 「冷えこむ, 老けこむ」など自然や生理的現

象をあらわすものや「考えこむ、話しこむ、思いこむ」などが含まれる。後者のグループの動詞は、V1が意志動詞であっても「～こむ」をつけることによって「ついつい考えこんでしまった」「つい話しこんでしまって、時間に気づかなかった」のように意志性が低くなるという特徴がある。従って、姫野(1999: 71)も指摘するように、「一緒に考えよう」「一緒に話そう」とはいつでも「*一緒に考えこもう」「*一緒に話しこもう」とはいえない。

もう一つ C タイプの中で特徴的なのは「冷えこむ」である。「冷えこむ」は、「今朝は冷えこむ」(気象条件)とはいえても「ビールが冷えこむ」「スイカが冷えこむ」とは通常いわない。つまり、「冷える」には「寒くなる」という意味と「冷たくなる」という意味があるが、「～こむ」と共起するのは前者のみである。

一方、D タイプは「V1の(反復)行為により生じる変化」をあらわしている。これら C タイプ、D タイプの特徴を踏まえて産出文を分析すると、低受容度文と判定された理由は、表4のようにまとめられる。

表4 低受容度文と判定した理由(Cタイプ, Dタイプ)

	V1	V2	低受容度文と判定した理由
I型	○	×	理由ア) 意志的行為に「～こむ」をつけている。 例 1: もう一時間もこの問題を考えこんだのに、答えられない。 (→考えた)
			理由イ) 「～こむ」のつかない意味に「～こむ」をつけている。 例 2: ビールは十分冷えこんでいる。 (→冷えている)
			理由ウ) D タイプの「～こむ」の用法ではない。 例 3: いらっしゃい、いらっしゃい。靴を磨きこんであげよう。 (→磨いて)
			理由エ) 他の後項動詞と混同している。 例 4: 彼はどうすればいいか、思いこんでいる。 (→思い悩んでいる)
II型	×	○	理由オ) 他の前項動詞と混同している。 例 5: 少年は深く寝こんだ。 (→眠りこんだ)
		×	理由カ) 全く別の語と混同している。 例 6: 寒い～。暖かいところで寝こみたい。 (→眠りたい)

注: エ) オ) カ)はそれぞれ, A, B タイプの vi) vii) viii) に対応。(→)は修正案。

以上の3類6種が、母語話者が低受容度文と判定した理由(を筆者が推測したもの)であるが、言い換えれば、これらは学習者が C, D タイプ「V1+こむ」の使用に関して犯す過剰般化(エ

ラー)のタイプであると考えることができる。

3-3. 研究課題 (3)——4種の結合タイプにおける習得困難点は何か

前節でみたように、「二格を伴う用法」(A, B タイプ)には4類8種、「二格を伴わない用法」(C, D タイプ)には3類6種の過剰般化(エラー)が観察された。本節では、前節の結果をもとに、学習者は「～こむ」の意味習得においてどのような習得困難点を持っているかを探ってみたい。その方法としてここでは、学習者の産出した低受容度文の数を(低受容度文と判定した)理由ごとに数量化し、その結果から習得困難点を予測するという方法をとる。

手続きとして、前節で整理したA, B タイプ4類8種, C, D タイプ3類6種の理由を、再度判定者3名に示し、改めて各自が低受容度文と判断した文すべてについて、低受容度文と判定した理由がそのいずれであるかを記述してもらった。以下、「二格を伴う用法」と「二格を伴わない用法」に分けてみていく。

(1) 「二格を伴う用法」(A タイプ, B タイプ)

表5は、その集計の抜粋であるが、低受容度文189文に3人の判定者がそれぞれその理由を記したわけであるから、理由の数は3人の判定者の延べ数となる。ここでは、3人が低受容度文とした文は3点、2人の場合は2点、1人だけの場合は1点として理由別の点数を産出した。例えば、表5の項目「流れこむ」の冒頭の文をみていただきたい。既知未知度は①であると申告して産出された「あの人は3年前にこの町に流れこんで以来、住みついている。」という文は、3人の判定者が全員低受容度文であると判定した。そして、その理由は3人とも理由 vi であった。

表5 低受容度文とその理由(抜粋)

項目	既知未知	産出文	低受容とした人数N=3	理由 i	理由 ii	理由 iii	理由 iv	理由 v	理由 vi	理由 vii	理由 viii
流れこむ	①	あの人は3年前にこの町に <u>流れこんで</u> 以来、住みついている。	3						3		
流れこむ	③	知らない中に、人込みに <u>流れこんで</u> しまった。	3							3	
流れこむ	③	トイレの水を流した瞬間、自分の指からはずれた指輪が一緒に <u>流れこんで</u> しまった。	3			3					
駆けこむ	①	先に行って、後で <u>駆けこみ</u> で行くから。	3		2						1
駆けこむ	②	不良少年に <u>駆けこ</u> まれて、できるだけ力を尽くして逃げた。	3								3

上記のようにして整理した結果をAタイプ, Bタイプに分けて集計したものが表6である。また図1は表6をグラフにしたものである。

表6 タイプ別にみた低受容度文となる理由 (網がけは着目する項目)

タイプ	理由 i	理由 ii	理由 iii	理由 iv	理由 v	理由 vi	理由 vii	理由 viii	合計(点数)
A タイプ	10 (2.9%)	159 (46.1%)	13 (3.8%)	0 (0.0%)	1 (0.3%)	93 (27.0%)	36 (10.4%)	33 (9.6%)	345
B タイプ	0 (0.0%)	17 (9.7%)	0 (0.0%)	36 (20.6%)	23 (13.1%)	28 (16.0%)	30 (18.9%)	27 (21.7%)	161

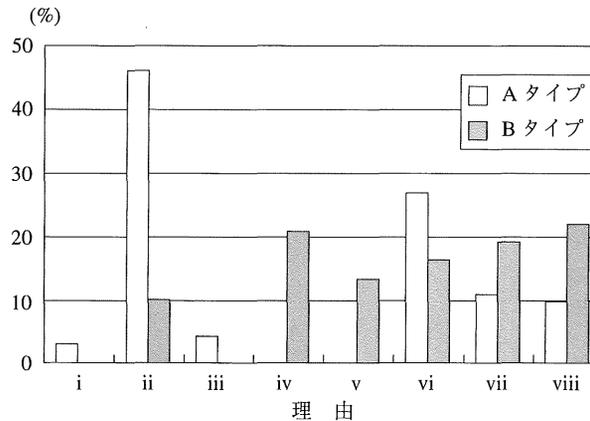


図1 タイプ別にみた、低受容度文と判定された理由

表6及び図1から分かるように、Aタイプについては理由ii(=「内部への移動」という意味のない文脈で「～こむ」をつけている)による低受容度文が全体の約46%を占めている。また理由iii(=内部に入ったものがそこに留まらない文脈で「～こむ」をつけている)は、Aタイプにしかあらわれないが、これは母語話者がAタイプの「～こむ」の意味をどのように捉えているかを知る上で、非常に重要である。

他方、Bタイプについては、理由v(=「動作・行為そのもの」に関心のある文脈で「～こむ」をつけている)、理由vi(=行為の目的を明示せずに「～こむ」をつけている)による低受容度文が出現した。これは、Aタイプにはみられない過剰般化である。

(2) 「二格を伴わない用法」Cタイプ、Dタイプ

Cタイプ、Dタイプについても同様に理由ごとに集計すると、表7のようになる。また図2は表7をグラフにしたものである。

表7及び図2にみるように、Cタイプの過剰般化の約半数は、理由イ(=「意志的行為」に「～こむ」をつけてしまった)によるものであり、Dタイプの約半数は、理由ウ(=Dタイプの用法でないところで使ってしまった)によるものである。

表7 タイプ別にみた低受容度文となる理由 (Cタイプ, Dタイプ)

タイプ	理由ア	理由イ	理由ウ	理由エ	理由オ	理由カ	合計(点数)
Cタイプ	12 (21.1%)	27 (47.4%)	0 (0.0%)	3 (5.3%)	9 (15.8%)	6 (10.5%)	57
Dタイプ	0 (0.0%)	3 (10.0%)	14 (46.7%)	5 (16.7%)	0 (0.0%)	8 (26.7%)	30

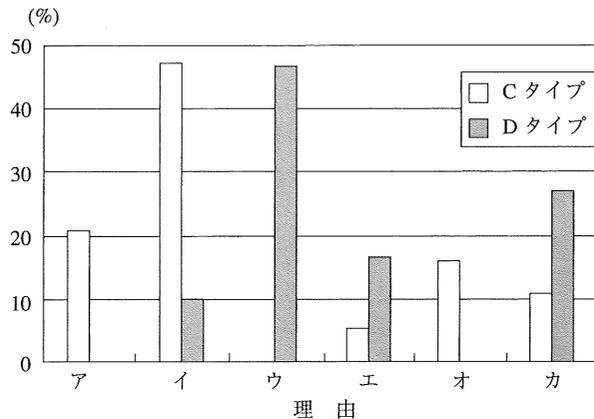


図2 タイプ別にみた低受容度文と判定された理由

4. 考察——何故、過剰般化を犯すのか

上記の結果を踏まえ、本節では「何故、過剰般化を犯すのか」という観点から考察する。

4-1. 「二格を伴う用法」(Aタイプ, Bタイプ)について

前節でみた結果から、理由 ii や理由 iii は A タイプにおいて生じる過剰般化であり、理由 v や理由 vi は B タイプにおいて生じる過剰般化であるということが分かった。では、何故学習者は、A タイプにおいて理由 ii や理由 iii の過剰般化を犯しやすいのだろうか。また B タイプにおいては、何故理由 iv と理由 v の過剰般化を犯すのだろうか。以下では、具体例をみながらこれらの点を検討してみたい。

まず、理由 ii と理由 iii によって低受容度文となった A タイプの産出文からみてみよう。

- (1) 公園で遊んでいるのに、お父さんから呼びこまれて家に帰った。
- (2) 机の上にはいろんなものが積みこんである。
- (3) ご飯が炊きこまれるのを待っている。

(4) バasketボールをちゃんと網に投げこむのは彼の得意技だ。

(5) トイレの水を流した途端、指から外れた指輪が一緒に流れこんでしまった。

繰り返し述べているように、Aタイプは「～こむ」を付加することによって新たに「内部への移動」の意味が生じるタイプであるが、(1)から(3)はすべて「内部への移動」の意味のない文脈で「V1+こむ」を使った例である。このような文脈で「V1+こむ」を使った例はAタイプでは159例(表6)あり、全体の46.09%に及ぶ。また(4)(5)は、内部に入ったものが「そこに留まらない」文脈で「V1+こむ」を使った例である。

このような過剰般化の原因として考えられるのは、「V1+こむ」には「庭にカプセルを埋める」を「庭にカプセルを埋めこむ(=Bタイプ)」のように言い換えても、意味上支障のない用例があることから、〈「N+V1」≡「N+{V1+こむ}」〉という処理方略⁴を作り出し、それをAタイプにも適用してしまったのではないかということである。今回の調査対象者に「～こむ」の意味は何かと尋ねると、「中に入る」「しっかりV1する」など複数の意味があると答えた。それにも関わらず、Aタイプに上記のような方略を適用するということは、「V1+こむ」には複数の結合タイプがあり、その結合タイプによって「～こむ」の役割が違うという認識が内在化されていないためであると推測される。

次に、理由ivと理由vによって低受容度文となったBタイプをみてみよう。Bタイプは、「庭にカプセルを埋める≡庭にカプセルを埋めこむ」「洋服を押入れにしまう≡洋服を押入れにしまいこむ」のように「～こむ」が単に強調の意を添えるだけの場合が多い。従って、Bタイプは多くの場合、〈「N+V1」≡「N+{V1+こむ}」〉方略を適用しても適切文が産出できる。しかし、次の例はどうであろうか。

(6) この木は祖父の植えこんだものです。

(7) 彼は死体を埋めこんだ。

(8) どう？ 旅行なんか行かないで、お金かかるから知り合いの家に泊まりこんだら？

(9) どこの家だって10年も住みこんだら、ものは山ほど増える。

(10) もう引越しなんていや、ここにずっと住みこみたい。

(6)(7)は「しっかり植える/埋める」ことに主眼があるのではなく、「祖父」や「彼」の行為に着目した文脈であると解釈されて低受容度文となった例である。また(8)(9)(10)は、目的性(「仕事のために」「家政婦として他人の家に」など)のない文脈で「泊まりこむ、住みこむ」を使ってしまったため低受容度文となった例である。これらの過剰般化を引き起こす原因も、Aタイプの場合と同様、〈「N+V1」≡「N+{V1+こむ}」〉方略を過剰に適用したものであると解釈される。

⁴ Selinker (1972: 37) は、学習者の中間言語 (interlanguage) には5つの主要なプロセス(①言語転移、②目標言語規則の過剰般化、③訓練の転移、④第二言語の学習方略、⑤第二言語の伝達方略)が作用すると述べているが、この方略は④に当たると考えられる。

Bタイプの場合、「V1」と「V1+こむ」の使い分けは文脈に依存しており、この点においてBタイプは、Aタイプの「V1+こむ」より習得が難しいかもしれない。中でも、「住みこむ」や「泊まりこむ」のように、その場に留まるという状態性の強い前項動詞と共起する場合は、「そこに留まる目的」に視点が移ってしまうため単なる強調に留まらず特別な意味合いが生じる(松田2001)。(8)(9)(10)のような文が産出されるのは、そのような意味合いを知らず、〈「N+V1」≡「N+{V1+こむ}」〉方略を用いて、V1との結びつきからだけで文を作ったためであると考えられる。

以上から、学習者は〈「N+V1」≡「N+{V1+こむ}」〉方略を形成し、その方略を過剰に適用することによって低受容度文を生み出していることが推測される。このように推測することで、Aタイプに何故、理由iiによる過剰般化が多いのか、またBタイプに何故、理由vや理由viによる過剰般化が生じるのかが説明できる。さらに、Aタイプに比べてBタイプの低受容度率が少ないという結果(表2)についても、Bタイプはある程度〈「N+V1」≡「N+{V1+こむ}」〉方略が適用できるからだと説明することができる。

但し、〈「N+V1」≡「N+{V1+こむ}」〉方略が過剰に適用されているとして説明しうるのは、理由ii, iii, iv, v, viによる過剰般化(約75%)だけであり、理由vii, viiiのような前項動詞(V1)の選択混同(約25%)の原因については説明できない。選択混同に関しては、学習者母語の影響(例えば、韓国語においては「呼ぶ」と「誘う」は類似した意味をあらわすことがある)や類義語との差異化能力⁵(例えば、「入りこむ、忍びこむ、もぐりこむ」の使い分け)という観点からの考察が必要であるが、この点については更なる調査を加えた上で、別稿を用意することにしたい。

4-2. 「二格を伴わない用法」(Cタイプ、Dタイプ)について

次に、「二格を伴わない用法」について考察する。Cタイプは、4タイプのうちで最も低受容度率が低かった。Cタイプというのは、「冷えこむ、眠りこむ、黙りこむ、老けこむ」など「～こむ」がV1の状態変化に強調の意を添えるタイプであることから、上記の方略が成功したと考えられる。しかしながら、次のような過剰般化の例も観察された。

- (11) 昨日から冷蔵庫に入っているビールは十分冷えこんでいる。
 - (12) アイスcreamは冷凍室に入れて冷えこんでから食べるのが最高だ。
 - (13) もう一時間もこの問題を考えこんだのに、答えられない。
 - (14) 新しい教科書の件について話しこんでいる途中、議論になってけんかをしてしまった。
- 上述したように、「冷えこむ」は「気象条件(または景気、関係)」に限って用いられる。しかし、

⁵ 深谷・田中(1996)は、語彙の習得過程は、①その語のプロトタイプを知ること(「典型化」)、②類語との意味的差異を知ること(「差異化」)、③その語の意味範囲をすべて知ること(「一般化」)の相互作用を通して進むと述べている。

学習者はこの点の理解が十分でないため、(11)(12)のような文を産出したと考えられる。また「考えこむ」や「話しこむ」は、「考える」「話す」自体は意志動詞であるが、「～こむ」をつけることによって無意志動詞化する。しかし、学習者は(13)や(14)のように意志的行為に「考えこむ」や「話しこむ」を使っている。

これらの例は、V1の使える状況を想起してそのまま「～こむ」をつけてしまったことが窺える。即ち、Cタイプの過剰般化もまた、AタイプやBタイプと同様、 $\langle \text{「N+V1」} \equiv \text{「N+}\{V1+\text{こむ}\}$ 」方略を過剰に適用してしまった結果であると考えられる。

最後にDタイプについてであるが、Dタイプの「V1+こむ」は意志的な(反復)行為により「満足できる状態」への変化をあらわす用法である。学習者は、Dタイプ「煮こむ」(=おいしく食べられる状態まで何回も火を通す/または時間をかけて煮る)については、全員受容文を産出した。しかし、次のような低受容度文も産出した。

(15) いらっしゃい、いらっしゃい、靴を磨きこんであげますよ。

(16) この湖の一番深いところまで泳ぎこんでみました。

(15)や(16)のような過剰般化はすべて、「反復行為」により「満足できる状態へ状態変化」するというDタイプの「～こむ」の用法を知らないことによる誤用であると考えられるが、言い換えれば、Dタイプにおいても、他のタイプと同様、 $\langle \text{「N+V1」} \equiv \text{「N+}\{V1+\text{こむ}\}$ 」方略が過剰に適用されているといえる。

但し、C、Dタイプにおいても、学習者が形成した方略の過剰適用として説明できるのは、理由アから理由エまでの過剰般化(約74%)であり、理由オと理由カについては別の説明が必要である。

5. 本稿のまとめと日本語教育への示唆

本稿では、複合動詞後項「～こむ」を取り上げ、(1)「V1+こむ」の意味の習得状況はどのようなものか、(2)実際の使用に当たって、どのような過剰般化を犯すか、(3)4種の結合タイプにおける習得困難点は何か、の3つの観点から調査した。その結果、「V1+こむ」の意味に関する習得状況はかなり低いもの(産出文の43.87%は低受容度文)であることが分かった。今回の調査対象者は全員日本の大学・大学院に所属する超上級者であり、いわば日本語の習得に成功した人たちである。しかし、本調査でみる限り、語彙レベルでは知っていても、文は正しく作れないという結果であった。

次に、過剰般化のタイプは、A、Bタイプについては4類8種(表3)、C、Dタイプについては3類6種(表4)が認められた。そして、「V1+こむ」の4種の結合タイプ(表1)によって過剰般化のタイプは異なることが分かった。また過剰般化のうち、最も多い誤用は、単純動詞(V1)

に訂正すれば受容文になるような誤用であった。このことから、学習者は〈「N+V1」≡「N+{V1+こむ}」〉という方略を用いて文を作っているという推測が成り立つ。〈「N+V1」≡「N+{V1+こむ}」〉方略は、「～こむ」がV1に強意を添える用法であるBタイプやCタイプの一部の項目には有効な方略である。問題は、この方略を過剰に適用してしまうことである。「～こむ」を付加することによって新たに「～の中にはいる/入れる」という意味が生じるAタイプには、〈「N+V1」≡「N+{V1+こむ}」〉方略は全く機能しない。そのため、この方略を用いれば、理由ii(=「内部への移動」の意味のない文脈で「～こむ」をつけてしまっている)による過剰般化を多数生じさせてしまうことになる。今回の調査対象者は、「～こむ」には「飛びこむ、持ちこむ、駆けこむ」(Aタイプ)のように「中にはいる/入れる」という意味や「ぎゅっと詰めこむ、奥に入りこむ」(Bタイプ)のようにV1の行為に強意を添える意味などがあることは十分知っている。それにも関わらず、Aタイプの過剰般化は、その7割以上が〈「N+V1」≡「N+{V1+こむ}」〉方略を過剰に適用していると考えられるものであった。

このことから推測されることは、学習者は「～こむ」の多様な意味を知っている、その知識は場面状況との「連合」によりChunk(=まとまりで未分析のまま)として覚えているだけで、それらの意味がどの結合タイプの「V1+こむ」と結びつくかの理解は十分でないということである。このことが〈「N+V1」≡「N+{V1+こむ}」〉方略の過剰適用を引き起こし、「～こむ」の意味の過剰般化を生み出しているとする、と、「V1+こむ」の多様な意味を自力で学ぶことには限界があるように思われる。

言語教育の役割は、学習者の試行錯誤の学習過程をできるだけうまく支援することだといわれている。では、「V1+こむ」の意味習得においてどのような支援が可能であろうか。本調査の結果からいえば、「V1+こむ」には4種の結合タイプがあり、1-2.で述べたように前項動詞(V1)との結合のあり方によって「～こむ」の役割が違うことを認識させる必要があるように思われる。その方法の一つとして、松田(2001)の提案した「～こむ」のコア図式(=意味的イメージ)は有効であるように思われる。認知意味論では、ある語に複数の語義がある場合、それらの語義をイメージ図式によって表現する方法が試みられている。コア図式というのは、個々の語義に当てられるイメージ図式を包含するいわばコアとなる図式のことである。松田は、上でみた「～こむ」のすべての用法を包含するコア図式を図3のようにあらわしている。

四角はある領域(領域X)を示しており、網掛で示した円(領域Y)は領域X内での「難可逆的な領域」(=主観的に、領域Xの外に出るのが困難だと感じられる領域)をイメージしたものである。矢印【 α 】の部分は領域Xに入ることを意味的イメージをあらわし、矢印【 β 】の部分は領域Yに入ることを意味的イメージをあらわしている。つまり、【 α 】は「～の中に入る/入れる」などのことばで表現される意味的イメージと類似するものであり、【 β 】は「新鮮な空気を吸いこむ。」にみられるように「しっかりと、奥深くV1する。」などのことばで表現される意味的

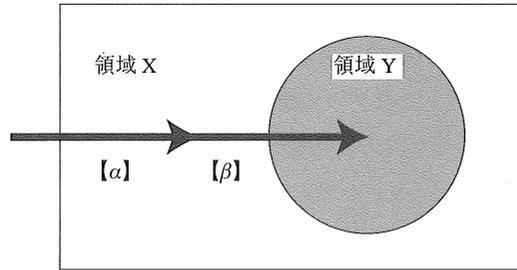


図3 「～こむ」のコア図式

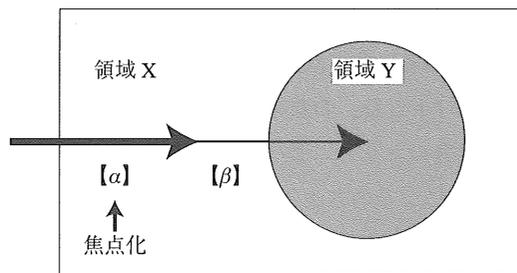


図4 Aタイプ「～こむ」のイメージ図式

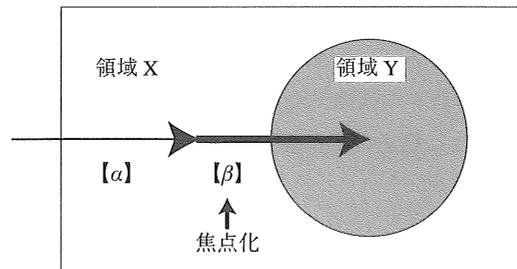


図5 Bタイプ「～こむ」のイメージ図式

イメージと類似するものである。

そして、A、B、C、Dタイプのそれぞれ「～こむ」の意味は、このコア図式のある部分が図 (figure) として際立つ (salient) ことにより生じる意味であるとする。例えば、Aタイプである「飛びこむ」「投げこむ」は、「飛んで、中にはいる」「投げて、中に入れる」という意味であると理解されるが、それはコア図式の【α】の部分を図として焦点化される用法であるからだと説明される(図4)。またBタイプである「埋めこむ」「植えこむ」は「その場にしっかりと固着させる」というニュアンスが強いが、それはコア図式の【β】の部分(難可逆的な領域Yに入る)が焦点化される用法であるからだと説明される(図5)。

また C, D タイプについても、心理的な領域を想定することで、A, B タイプのバリエーションとして説明されうるとしている(詳細は松田 2001 を参照されたい)。

以上のように、松田では「V1+こむ」の4種の結合タイプが実に単純な図式によって説明されている。学習方略としてこのような図式と用例とを相互参照させれば、「～こむ」の身体感覚のようなものが得られ、それによって「V1+こむ」の意味が実感を伴って理解されるのではないだろうか。そして、さまざまな文脈の中で個々に覚えた用例もコア図式に結びつけて整理すれば、「V1+こむ」の意味は確かな意味知識として定着するのではないだろうか。従来の研究では、「V1+こむ」には多様な意味があることが強調される傾向が強く、学習者はその複雑さのために「V1+こむ」の習得は困難だと思こんでいる。しかし、その複雑さから解放させられるような支援ができれば、「V1+こむ」の意味習得は進むはずである。

以上、教育的示唆として、「V1+こむ」の意味習得は、「～こむ」の多様な意味を知るだけでは不十分であり、V1とV2の結合のあり方によって「～こむ」の役割が異なることを認識する必要があることを指摘した。さらに、その方法としてコア図式による方法を提案した。

しかし、学習を支援する場においてどのような形でコア図式を活用するかについては、さらなる研究が必要である。この点については今後の課題としたい。

謝 辞

本稿執筆に際し、お茶の水女子大学の長友和彦先生、岡崎眸先生には貴重なコメントをいただいた。またお茶の水女子大学の佐々木嘉則先生には本稿の論理的構成、分析の適切性など細部にわたってご指導を受けた。ここに感謝の意を表したい。

参 考 文 献

- 石井正彦 (1988) 「辞書に載る複合動詞・載らない複合動詞」『日本語学』vol. 7, 明治書院。
 斎藤倫明・石井正彦 (1997) 『語形成』日本語研究資料集 第1期第13巻, ひつじ書房。
 姫野昌子 (1997) 「複合動詞・『～つく』と『～つける』」『語形成』, ひつじ書房。
 ——— (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』, ひつじ書房。
 深谷昌広・田中茂範 (1996) 『コトバの意味づけ論』, 紀伊国屋書店。
 田中茂範編 (1987) 『基本動詞の意味論: コアとプロトタイプ』, 三友社出版。
 田中茂範 (1990) 『認知意味論: 英語動詞の多義の構造』, 三友社出版。
 野村雅昭・石井正彦 (1987) 『複合動詞資料集』, 国立国語研究所報告。
 松田文子 (2000a) 「日本語学習者による語彙習得」『世界の日本語教育』10号。
 ——— (2000b) 「複合動詞の意味理解方略の実態と習得困難点」『言語文化と日本語教育』20号。
 ——— (2001) 「コア図式を用いた複合動詞後項『～こむ』の認知意味論的説明」『日本語教育』111号。
 森田良行 (1978) 「日本語の複合動詞について」『講座日本語教育』, 早稲田大学語学教育研究所。

Clark, E. 1973. What's in word? In T. Moore(ed.), *Cognitive development and the acquisition of*

language. New York: Academic Press.

Selinker, L. 1972. Interlanguage. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching* 10: 209-231.

資料1 調査項目

A タイプの調査語彙	B タイプの調査語彙	C タイプの調査語彙	D タイプの調査語彙
(自) 流れこむ, 駆けこむ, 逃げこむ, どなりこむ, 忍びこむ, 殴りこむ, 踏みこむ (他) 書きこむ, 投げこむ, 呼びこむ, 運びこむ, 流しこむ, 取りこむ, 誘いこむ, 炊きこむ, 編みこむ, 押しこむ, 積みこむ, 送りこむ, 引きこむ, 持ちこむ, 追いこむ, 混ぜこむ, 折りこむ (24)	(自) 泊まりこむ, 乗りこむ, 入りこむ, もぐりこむ, 住みこむ, 上がりこむ, 染みこむ, 紛れこむ (他) 飲みこむ, 吸いこむ, しまいこむ, 詰めこむ, 植えこむ, 埋めこむ, 貯めこむ, 教えこむ, 抱きこむ (17)	(自) 眠りこむ, 黙りこむ, 冷えこむ, 老けこむ, 思いこむ, 考えこむ, (へなへなど)座りこむ, 話しこむ, 寝こむ (9)	(自) 泳ぎこむ (他) 煮こむ, 使いこむ, 磨きこむ (4)

資料2 A タイプの産出文と低受容度文数

(N=10)

項目	産出文数 a	低受容度 文数 b	低受容度率 $b/a \times 100$	既知 ①	既知 ②	③ 未知類推 可	④ 未知類推 不可とした 人数 N=10
書きこむ	10	0	0.0%	0	0	0	0
持ちこむ	13	2	15.4%	2	0	0	0
駆けこむ	13	3	23.1%	1	1	1	0
運びこむ	13	3	23.1%	1	2	0	0
押しこむ	15	6	40.0%	0	1	5	0
投げこむ	12	5	41.7%	1	1	4	1
流れこむ	11	5	45.5%	1	1	3	1
編みこむ	11	5	45.5%	0	4	1	1
追いこむ	10	5	50.0%	0	2	3	1
炊きこむ	10	5	50.0%	0	2	3	2
忍びこむ	9	5	55.6%	1	1	3	3
逃げこむ	10	6	60.0%	0	1	4	0
誘いこむ	9	6	66.7%	2	0	4	2
取りこむ	9	6	66.7%	1	4	2	2
引きこむ	7	6	85.7%	2	0	3	3
積みこむ	9	8	88.9%	1	5	2	4
送りこむ	11	10	90.91%	1	4	5	1
呼びこむ	10	10	100.0%	1	3	6	2
混ぜこむ	7	7	100.0%	1	3	3	3
どなりこむ	8	8	100.0%	0	3	5	3
殴りこむ	7	7	100.0%	4	0	3	4
流しこむ	5	5	100.0%	1	1	3	5
踏みこむ	5	5	100.0%	2	2	1	6
折りこむ	3	3	100.0%	0	1	2	7
計	227	131		23	42	66	51

資料3 Bタイプの産出文と低受容度文数

(N = 10)

項目	産出文数 a	低受容度 文数 b	低受容度率 $b/a \times 100$	既知①	既知②	③ 未知類推 可	④ 未知類推 不可とした 人数 N=10
飲みこむ	6	0	0.0%	0	0	0	1
貯めこむ	10	0	0.0%	0	0	0	2
しまいこむ	7	0	0.0%	0	0	0	4
詰めこむ	9	1	11.1%	0	1	0	4
もぐりこむ	7	1	14.3%	0	1	0	3
植えこむ	9	2	22.2%	0	0	2	1
吸いこむ	12	3	25.0%	1	0	2	0
入りこむ	11	3	27.3%	1	0	2	1
染みこむ	11	4	36.4%	1	0	1	1
乗りこむ	8	3	37.5%	1	1	1	3
泊まりこむ	10	4	40.0%	1	2	2	1
教えこむ	10	5	50.0%	0	3	2	2
上がりこむ	5	3	60.0%	0	0	3	5
紛れこむ	8	5	62.5%	0	2	3	2
住みこむ	9	6	66.7%	1	3	0	2
埋めこむ	11	8	72.7%	0	4	4	0
抱きこむ	10	10	100.0%	0	3	7	3
計	153	58		6	20	29	35

資料4 Cタイプの産出文と低受容度文数

(N = 10)

項目	産出文数 a	低受容度 文数 b	低受容度率 $b/a \times 100$	既知①	既知②	③ 未知類推 可	④ 未知類推 不可とした 人数 N=10
黙りこむ	8	0	0.0%	0	0	0	2
考えこむ	9	3	0.0%	0	1	2	2
眠りこむ	10	1	10.0%	0	0	1	1
話しこむ	9	1	11.1%	0	0	1	2
座りこむ	7	1	14.3%	0	0	1	2
思いこむ	12	2	16.7%	1	1	0	0
老けこむ	6	1	16.7%	0	0	1	1
寝こむ	12	4	33.3%	0	2	2	0
冷えこむ	10	4	40.0%	3	0	1	1
計	83	17		4	4	9	11

資料5 Dタイプの産出文と低受容度文数

(N = 10)

項目	産出文数 a	低受容度 文数 b	低受容度率 $b/a \times 100$	既知 ①	既知 ②	③ 未知類推 可	④ 未知類推 不可とした 人数 N=10
煮こむ	11	0	0.0%	0	0	0	0
使いこむ	5	1	20.0%	0	0	1	4
磨きこむ	8	5	62.5%	1	1	3	3
泳ぎこむ	3	3	100.0%	0	0	3	6
計	27	9		1	1	7	13